

再読・倉橋惣三



倉橋惣三の「子どもの生活」論に、

保育評価の手がかりを探る——外遊びの場合——

児玉衣子

はじめに

現在、日本の保育のよくある一日の生活は、保育者と子どもとの刻々のかかわりを本体内にしているが、活動としては、排泄や食事等の生理的要因に基づく活動、自由遊びや設定活動等の子どもの気持ちの充足感にかかわる活動、基本的生活習慣や園生活での決まり事やマナー等にかかわる活動、という二種類の性格の異なる活動が渾然一体になって成立している。また、一日の活動予定は時間割で進むのではない。保育者が子どもたちの充足感を見計らったり突発事に対処しつつ見通しをつけたりする、いわば保育者の教育的タクト（拍子）ともいえる感覚により進められ、その進行を「流れ」と呼び習わしている。保育を「子どもの生活」としてこのように組織立てたのは倉橋惣三である。

保育は目標と計画をもち、つくり出される「子どもの生活」は内容濃く存在する。しかし、保育者が実践後に評価（振り返り）をしようとする、前述の特色から察しがつくように、

難しい。しかし、一人ひとりの保育者による日々の自らの実践の振り返りは、保育の質を決定し、子どもの成長に影響を及ぼす。

保育者が振り返りの視点を豊かにする一つの方法は、保育の「生活」の内容をより明瞭かつ豊富に知ることである。なぜなら子どもの育ちの大事な部分である心情・意欲・態度等は数値化も即断も困難であり、むしろ当の子どもを親身によく知る保育者自身の成熟・職業的熟練等を経てなされる客観化、待つ気持ち等が最も子どもを活かし、育てる。保育者が保育の「生活」をより詳しく知ることは自己成長にかかわるからである。本論はその一助として、倉橋惣三の主張を探り、そこに評価の手がかりを求める試みである。

ただし、現在の「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」は共に、特に三歳以上児については保育内容五領域によって、幼児期に育つことが望ましい心情・意欲・態度等を示している。他方、倉橋が活躍したのは保育項目の時代であって「遊戯」「唱歌」「手技」「談話」等、具体的な活動名が示されていた。しかし、現在の保育内容五領域についても、その実現は具体的活動による以外にない。そこに倉橋の「子どもの生活」論を現在も取り上げる意義を認め、以下、検討を始めたい。

1 倉橋惣三の初期の「子どもの生活」論から

倉橋惣三は彼独自の保育論を一九二二（明治四五）年六月、京阪神三市連合保育会講演の「幼児保育の新目標」から出し始める。この時、彼は、新世紀は激しい社会変化により人の神経系統が圧迫されるゆえに新時代の教育的要求は神経系統の強靱な人間の形成にあるとし

て、それまでの室内偏重の保育を斥け、自然の中での外遊びの大いなる必要を説いた。

一九一四（大正三）年から翌年にかけて、最初の体系的保育論「保育入門」（「婦人と子ども」）が書かれる。初回を彼は「子どもの生活」と題して論じ始める。その内容は子どもの発達の特徴である。ここで彼は、子どもが発達の特徴を損なわれずに主体的に充実して成長することのできる生活を「子どもの生活」とし、それを実現するのが幼児教育だから、その具体化である保育は「子どもの生活」であるとするのである。

さらに、「保育入門」の中で倉橋は、幼児が充実する原則として、（一）自発的（子どもの内発的欲求に従う）、（二）相互的（幼児を集団にするのは、同年輩を求める共同生活の欲求を充たして幼児相互の教育作用を活かすため）、（三）具体的（知育、徳育、体育等、生活の一断面を抽象して取り上げず、生活全体を教育対象に）、（四）習慣的（動作や情緒の傾向を、躰形式ではなく習慣的に涵養）、という4項目を挙げている。また保育者の不断の留意として、（イ）身体の健全な発達、（ロ）神経系統の養護、（ハ）個性の保存（まだ淡い個性を圧迫、潰す等しない）という3点を挙げている。だから、保育はこれら4原則と3留意点を基に、具体的な活動毎の留意をもちつつ、一人ひとりの子どもへの共感と集団としての全体的な様子を見計らいながら展開されることになる。

2 初期の実践改革から — 外遊びと自由遊び —

右掲の主張により倉橋が当時の室内課業中心、打鐘による時間割等の保育のうち、真つ先に改革したのは外遊びと自由遊びである。「幼児保育の新目標」から強調された外遊びの重要

性は、講演直後から、夏休みの間に繁茂した園庭の雑草をわざと残して秋期に子どもたちが虫捕りに熱中できるようにした報告に改革の一端が示されている。また、自由遊びについては、それまでは全員そろうまでの猶予時間とか息抜き程度の認識であった様子である。しかし、一九一六年、倉橋は現在のお茶の水女子大学附属幼稚園の主事になると真つ先にフレール恩物を一括して竹かごへ入れ、自由に用いて遊べるようにした。自由遊び改革の第一歩であった。これら二つのうち、紙幅の都合により、ここでは外遊びを検討したい。

3 初期実践に見る今日の保育評価への手がかり — 外遊びの場合 —

外遊びは現在でも心身の健康、五感等の直接経験の大事さに結びつけて語られる。気持ち解放されるので仲間関係の成立、発展にも大いに関係する。それらはそのとおりであり、外遊びでも鬼ごっこ、かくれんぼ等、ルールや競争性をもち保育者が意図的に行った活動については、意図に従った振り返りがまず必要である。

その上で、倉橋がまず求めた外遊びは、野球、サッカー等の競争や勝負を意識する活動よりもっと基本的な自然の事物・事象に直接に触れる、つまり砂や土を掘り、セミやバッタを捕り、草花や実を摘み、氷や霜柱を手のひらにのせ、たき火の火を見つめるといった活動であったことに注意を向ける必要がある。神経を脅かされる要因に事欠かない社会の中で健康な身体・情緒・精神を育むには、乳幼児期から自然の事物・事象に身も心も一体化してしまふ外遊びの経験が土台とされているのである。なぜだろうか。それは、フレールが「生命の合一」と述べたことに通じるが、自然の事物・事象に自分の心身全体でかかわることは、

対象の生命感の中に自己を没入させる経験であり、大人でさえも自己の生命感を新しくされる。それを乳幼児期に豊かに積み重ねることは、自己を取り巻く世界を信頼し、自分自身を信頼するという自己存在の基本的な肯定感を育むからだろうと考えられる。

今日でも乳幼児期における園庭の役割は学校の校庭のそれとは大きく異なっている。すなわち、園庭という保護空間で乳幼児は土やアリや草花をはじめ、室内にはない光の明るさ、空間の広がり、空気の湿り気、匂い、音、鳥や虫の声、風、空、雲、雨、雷、周囲の景色等々にふれて感覚や思考を刺激されるだけではなく、「不思議」「惹かれる」「心が通じあうような」等々の五感には収まらない感覚をも豊かに味わっている。また、逆説的だが、熱中は調整、客観的判断、仲間等の感覚をも育てる。これらの感覚を通して育てられる自己肯定感、成長するにつれて人類、地球規模の生存問題、宗教・信条等、抽象的だが自分が信頼することのできる存在へ自己を結びつけ、共生に必要な親愛、調整、自己客観視等の感覚をも育てるとされる。そのことに保育者が気づくなら、外遊びは子どもと共に感動することを見つける豊かな機会になるだろう。

外遊びは保育の生活の中の一つの活動である。しかし、外遊びで子どもの心の内に育つものの豊かさや大切さを保育者が知った上で、だんご虫を見つけたりドングリを拾った時の子どもの生き生きした気持ちに付き合うなら、そこに行われる保育の振り返りは、確実に一人ひとりの子どもの今の生き生きした姿をとらえ、同時に、その子どものこれからの成長を見守るものになるだろう。

(龍谷大学短期大学部)